

山の頂きに立つ

高松市立林小学校 四年 菊池 ひより

私は、山に登る。毎週日曜日、家族と犬と登る。

六才の時から山に登り続けているのは体力作りのためだ、と母が始めたことだった。

今までに、216座の山に登った。香川県の山はほぼ全て登っており、四国百名山を完登することが私の今の目標になっている。

大型連休の時や、土日を使って本州の山も登ることがあるが、四国の山は本州にもおとらない山だと言える。なぜなら、とにかく急登が多く登りごたえがあるからだ。

日本百名山にも選ばれている、石づち山やつるぎ山は標高二千メートル近くあるものの、登山道はきれいにせいびされており登りやすい。

しかし、四国百名山はきれいな登山道ばかりではない。草がしげつていたり、登山道がくずれていたり、道はばが細くきけんだったり、けして安全な登山道ばかりではない。

だから登山を始めたころの私は、よく弱音をはいていた。何時間も山道を歩くことになれておらず、

「もうつかれた。帰りたい。」とか、

「歩きたくない。」と、言っていた。

それでも、と中で帰れるわけもなく、文句を言いながら歩き続けた。

「他の子は、サッカーや野球などで汗を流してがんばって運動している。あなたは、それが登山なの。あなたもがんばりなさい。」

と、母に何度も言われたが、（私は私だ、知ったこっちゃない。）と、機嫌を悪くして歩いていた。

夏は暑いし、冬は雪がつもるからとても寒い。それでも三年間登り続けているのは、山の頂上に着いたしゅん間の、あの何とも言えない気持ちの良さを私は知っているからだ。

山の頂きに立つすばらしさは、がんばって登った者しか味わえない特別な時間だ。空と雲が私の頭の近くを通り、家やビルも何もない絵にかいたような青々とした山々が、私をかげいしているようにゆう大に広がる。

とう明感のある、すんだ空気をめいっぱい肺の中に取り込んで、周りの山々に「やつほー!」と、さけぶ。山の頂きに立つ時間を味わうために、私はあの長い時間を歩き続けるの

だ。

私のような十才にもみたない子どもが登ることがまだまだめずらしいようで、と中ですれちがう登山者の人達にあいさつをする、必ず「がんばれ。」や、「えらいね。」と、声をかけてくれる。この言葉にとってもほろよいい気もちになる。これも、登山を続ける理由の一つかもしれない。

今、四国百名山の内、58座を登り終えている。六年生になるころまでには、完登したいと考えている。

ただ、高知県や愛媛県、とく島県は家から遠くそうそう何度も行けないので、そんな時は、里山をいくつも登ってトレーニングをする。おかげで、体力はついてきた。

そして、何といっても登山の後に食べる下山メシは最高だ。がんばったごほうびに、食べたい物を食べさせてくれる。おなかペコペコのじょうたいで、ガツガツと食べる下山メシは、体も心も満たされてゆくと実感することが出来る。

この先、私が大人になった時、山に登り続けていることがどんな風に生かされるのかわからない。もしかしたら、日本一高いふじ山に登って、外国の山にも登っている、強くてチャレンジャーな女せいになっているかもしれない。未来のことは分からないが、そんな大人になればいいと思う。

山の頂きには、何も無い。テレビもないし、ゲームもない。けいたい圏外だし、おもちゃもない。ただ、どこまでも広がる空と、白く大きな雲、サンサンとてらす太陽に、ゆう大な山があるだけだ。

そんな場所で家族そろって同じけしきを見ながら頂きメシを食べ、少しの時間を山頂ですごす。山の頂きとは、特別な場所でもあるのだ。

だから、自然とこんな会話になる。

「幸せだね。」と。

私は、山に登る。それは、山の頂きに立つためだ。これからの長い人生、私は登り続けるだろう。

最後に、いつも私を山へ連れていってくれる家族に感しゃを伝えたい。ありがとう。これからもよろしくね。